

雪女

岡本綺堂

青空文庫

○君は語る。

大正の初年から某商会の満洲支店詰を勤めていた堀部君が足かけ十年振りで内地へ帰つて来て、彼が満洲で遭遇した雪女の不思議な話を聞かせてくれた。

この出来事の舞台は奉天ほうてんに近い芹菜堡子ぎんさいほしとかいう所だそうである。わたしもかつて満洲の土地を踏んだことがあるが、その芹菜堡子とかいうのはどんなところか知らない。しかし、それがい

わゆる雲^{うん}朔^{さく}に近い荒涼たる寒村であることは容易に想像される。堀部君は商会の用向きで、遼^{りょう}陽^{よう}の支店を出発して、まず撫^ぶ順^{じゆん}の炭鉱へ行つて、それから汽車で蘇家屯へ引返して、蘇家屯^{そけちん}かち更に渾河^{こんが}の方面にむかつた。蘇家屯から奉天までは真つ直ぐに汽車で行かれるのであるが、堀部君は商売用の都合から渾河で汽車にわかれて、共に連れられたシナ人と二人で奉天街道をたどつて行つた。

一月の末で、おとといはここでもかなりの雪が降つた。きようは朝から陰^{つる}つて剣^ぎのように尖つた北風がひゆうひゆうと吹く。土地に馴れている堀部君は毛皮の帽子を眉深^{まぶか}にかぶつて、あついで外套の襟に顔をうずめて、十分に防寒の支度を整えていたのである

が、それでも総身そうみの血が凍るように冷えて来た。おまけに途中で日が暮れかかって、灰のような細かい雪が突然に吹きおろして来たので、堀部君はいよいよ遣り切れなくなつた。たずねる先は渾河と奉天との丁度まん中で、その土地でも有名な劉りゅうという資産家の宅であるが、そこまではまだ十七清里しんりほどあると聞かされて、堀部君はがっかりした。

日は暮れかかる、雪は降つて来る。これから満洲の田舎路を日本の里数で約三里も歩かせられては堪たまらないと思つたので、堀部君は途中で供のシナ人に相談した。

「これから劉の家までは大変だ。どこかそこらに泊めてもらうことは出来まいか。」

供のシナ人は堀部君の店に長く奉公して、きごころ氣心のよく知れている正直な青年であつた。彼は李多リーターというのが本名であるが、堀部君の店では日本式に李太郎と呼びならわしていた。

「劉家、遠いあります。」と、李太郎も白い息をふきながら答えた。「しかし、リユーツエーここらにコーチエン客棧ありません。」

「宿屋は勿論あるまいよ。だが、どこかの家で泊めてくれるだろう。どんた穢きたない家でも今夜は我慢するよ。この先の村へはいつたら訊きいて見てくれ。」

「よろしい、判りました。」

二人はだんだんに烈しくなつて来る粉雪のなかを衝いて、俯向うつむきがちにあえぎながら歩いて行くと、葉のない楊やなぎに囲まれた小さ

い村の入口にたどり着いた。大きい木のかげに堀部君を休ませて置いて、李太郎はその村へ駆け込んで行つたが、やがて引つ返して来て、一軒の家を見つけたと手柄顔に報告した。

「泊めてくれる家うち、すぐ見付けました。家の人、たいそう親切あります。家は綺麗、不乾浄ブーカンジンありません。」

綺麗でも穢くても大抵のことは我慢する覚悟で、堀部君は彼に誘われて行くと、それは石の井戸を前にした家で、ここらとしてはまず見苦しくない外構えであつた。外套の雪を払いながら、堀部君は転ころげるように門のなかへ駆け込むと、これは満洲地方で見ると普通の農家で、門の中にはかなり広い空地がある。その左の方には雇人の住家らしい小さい建物があつて、南にむかつた正面の

やや大きい建物が母屋おもやであるらしく思われた。

李太郎が先に立つて案内すると、母屋からは五十五、六にもなろうかと思われる老人が出て来て、こころよく二人を迎えた。なるほど親切な人物らしいと、堀部君もまず喜んで内へ誘い入れられた。家のうちは土どべつ竈つを据えたひと間をまん中にして、右と左とにひと間ずつの部屋が仕切られてあるらしく、堀部君らはその左の方の部屋に通された。そこはむろん土間で、南側と北側とには日本の床よりも少し高い寝床ねどこが設けられて、その上には古びた筵むしろが敷いてあった。土間には四角なテーブルのようなものが据えられて、木の腰掛けが三脚ならんでいた。

老人は自分がこの家の主人であると言った。この頃はここに

悪い感冒がはやつて、自分の妻も二人の雇人もみな病床に倒れて
 いるので碌々ろくろくにお構い申すことも出来ない、気の毒そうに言
 訳をしていた。

「それにしても何か食わしてもらいたい。李太郎、お前も手伝つ
 てなにか温かいものを拵こしらえてくれないか。」と、堀部君は寒気と
 疲労と空腹とにがっかりしながら言つた。

「よろしい、よろしい。」

李太郎も老人に頼んで、高コーリヤン梁カクの粥かゆを炊いてもらうことにな
 った。彼は手伝つて土竈の下を焚き始めた。その煙りがこちらの
 部屋まで流れ込んで来るので、堀部君は慌てて入口の戸を閉めた
 が、何分にも寒くて仕様がなないので、再びその戸をあけて出て、

自分も竈へつついの前にかがんでしまった。

老人が堀部君を歓待したのは子細しさいのあることで、彼は男女三人の子供をもっているが、長男は営口の方へ出稼ぎに行つて、それから更に上海へ移つて外国人の店に雇われている。次男は奉天へ行つて日本人のホテルに働いている。そういう事情から、彼は外国人に対しては自然に好意をもっている。殊に奉天のホテルでは次男を可愛がつてくれるといふので、日本人に対しては特別の親しみをもっているのであつた。その話をきいて、堀部君はいい家へ泊り合せたと思つた。粥は高粱の中へ豚の肉を入れたもので、その煮えるのを待ちかねて四、五碗すすり込むと、堀部君のひたいには汗がにじみ出して来た。

「やれ、ありがたい。これで生き返った。」

ほつと息をついて元の部屋へ戻ると、李太郎は竈の下の燃えさしを持って来て、寢床の煖炉だんろに入れてくれた。老人も枯れた高梁の枝をかかえて来て、惜し気もなしに炉の中へたくさん押込んだ。

「多謝トシエー、多謝。」

堀部君はしきりに礼を言いながら、炉のあたたまる間、テーブルの前に腰をおろすと、老人も来ていろいろの話をはじめた。この家は主人夫婦と、ことし十三になる娘と、別棟に住んでいる雇人二人と、現在のところでは一家内あわせて五人暮らしであるのに、その三人が枕に就いているので、働くものは老人と小娘に過ぎない。仕事のない冬の季節であるからいいようなもの、ほ

かの季節であつたらどうすることも出来ない、老人は顔を陰らせながら話した。それを気の毒そうに聞いているうちに、外の吹雪はいよいよ暴れて来たらしく、窓の戸をゆする風の音がさまざまに聞えた。

ここのらの農家では夜も灯をともしないのが習いで、ふだんならば火縄を吊るしておくに過ぎないのであるが、今夜は客へのかんた歡待いぶりに一挺の蠟ろうそく燭がテーブルの上にもさされている。その弱いひかりで堀部君は懐中時計を透かしてみると、午後六時を少し過ぎた頃であつた。ここのらの人たちはみな早寝であるが、堀部君にとつてはまだ宵の口である。いくら疲れていても、今からすぐに寝るわけにもいかないので、幾分か迷惑そうな顔をしている

老人を相手に、堀部君はまたいろいろの話をしているうちに、右の方の部屋で何かがたりという音がしたかと思うと、老人は俄かに顔色を変えて、あわただしく腰掛けを起つて、その部屋へ駆け込んで行つた。

その慌て加減があまりに烈しいので、堀部君も少しあつげに取られていると、老人はなにか低い声で口早にいつているらしかったが、それぎり暫くは出て来なかつた。

「どうしたんだらう。病人でも悪くなつたのか。」と、堀部君は李太郎に言つた。「お前そつと覗いてみるのぞ。」

ひとの内房を窺うというのは甚だよろしくないことであるので、李太郎は少し躊躇ちゆうちよしてはいるらしかったが、これも一種の不安

を感じたらしく、とうとう抜き足をして真ん中の土間へ忍び出て、右の方の部屋をそつと窺いに行つたが、やがて老人と一緒にこの部屋へ戻つて来た。老人の顔の色はまだ蒼ざめていた。

「病人、悪くなつたのではありません。」と、李太郎は説明した。しかし彼の顔色も少し穏かでないのが、堀部君の注意をひいた。「じゃ、どうしたんだ。」

「雪の姑クーニヤン娘、来るかも知れません。」

「なんだ、雪の姑娘というのは……。」

雪の姑娘——日本でいえば、雪女とか雪女郎とかいう意味であるらしい。堀部君は不思議そうに相手の顔を見つめっていると、李太郎は小声で答えた。

「雪の娘——鬼子コイツであります。」

「幽霊か。」と、堀部君もいよいよ眉まゆを皺しわめた。「そんな化け物が出るのか。」

「化け物、出ることあります。」と、李太郎は又ささやいた。

「この家、三年前にも娘を取られました。」

「娘を取る……。その化け物が……。おかしいな。ほんとうかい。」

「嘘ありません。」

なるほど嘘でもないらしい。死んだ者のように黙っている老人の蒼い顔には、強い強い恐怖の色が浮かんでいた。堀部君もしばらく黙って考えていた。

二

雪の娘——幾年か満洲に住んでいる堀部君も、かつてそんな話を聞いたことはなかったが、今夜はじめてその説明を李太郎の口から聞かされた。

今から三百年ほどの昔であろう。清の太祖が遼東一帯の地を斬り従えて、瀋陽——今の奉天——に都を建てた当時のことである。かずある侍妾のうちに姜氏といううるわしい女があつて、特に太祖の恩寵を蒙つていたので、それを妬むものが彼女に不貞のおこないがあると言ひ触らした。その相手は太祖の近臣で楊と

いう美少年であつた。それが太祖の耳に入つて、姜氏と楊とは残酷な拷問をうけた。妬む者の讒ざんげん言か、それとも本当に覚えのあることか、その噂うわさはまちまちでいずれとも決定しなかつたが、ともかくも二人は有罪と決められて、楊は死罪に行なわれた。姜氏は大雪のふる夕、赤裸にして手足を縛られて、生きながらに渾河こんがの流れへ投げ込まれた。

この悲惨な出来事があつて以来、大雪のふる夜には、妖麗な白い女の姿が吹雪の中へまぼろしのように現われて、それに出逢うものは命を亡うしなうのである。そればかりでなく、その白い影は折りおりに人家へも忍び込んで来て、若い娘を招き去るのである。招かれた娘のゆくえは判らない。彼女は姜氏の幽魂に導かれて、お

なじ渾河の水底へ押し沈められてしまうのであると、土地の者は恐れおののいている。その伝説は長く消えないで、渾河地方の雪の夜には妖麗幽怪な姑娘の物語が今もやはり繰返されているのである。現にこの家でも三年前、ちようど今夜のような吹雪の夜に、十三になる姉娘を誘い出された怖ろしい経験をもっているで、おとといの晩もゆうべも、一家内は安き心もなかった。幸いにきようは雪もやんだので、まずほつとしてみると、夕方からまたもやこんな烈しい吹雪となったので、風にゆられる戸の音にも天井を走る鼠の音にも、父の老人は弱い魂をおびやかされているのであった。

「ふうむ、どうも不思議だね。」と、堀部君はその奇怪な説明に

耳をかたむけた。「じゃあ、この家ではかつて娘を取られたことがあるんだね。」

「そうです。」と、李太郎が怖ろしそうに言った。「姉も十三で取られました。妹もことし十三になります。また取られるかも知れません。」

「だって、その雪女はこの家ばかり狙うわけじゃあるまい。近所にも若い娘はたくさんいるだろう。」

「しかし美しい娘、たくさんありません。この家の娘、たいそう美しい。わたくし今、見て来ました。」

「そうすると、美しい娘ばかり狙うのか。」

「美しい娘、雪の姑娘に妬まれます。」

「けしからんね。」と、堀部君は蠟燭の火を見つめながら言った。「美しい娘ばかり狙うというのは、まるで我れわれのような幽霊だ。」

李太郎はにっこりともしなかつた。彼もこの奇怪な伝説に対して、すこぶる根強い迷信をもっているらしいので、堀部君はおかしくなつて来た。

「で、昔からその白い女の正体をたしかに見届けた者はないんだね。」

「いいえ、見た者たくさんあります。あの雪の中に……。」と、李太郎は見えない表を指さした。「白い影のようなものが迷っています。そばへ近寄ったものはみな死にます。」

「それ以上のことは判らないんだね。で、その影のようなものは、戸が閉めてあつても、すうとはいって来るのか。」

「はいって来るときには、怖ろしい音がして戸がこわれます。戸を閉めて防ぐこと出来ません。」

「そうか。」と、堀部君は思わず声を立てて笑い出した。

日本語の判らない老人は、びっくりしたように客の笑い顔を見あげた。李太郎も眼をみはつて堀部君の顔を見つめていた。

「ここらにも馬賊はいるだろう。」と、堀部君は訊いた。

「マツエ馬賊、おります。」と、李太郎はうなずいた。

「それだよ。きつとそれだよ。」と、堀部君はやはり笑いながら言つた。「馬賊にも限るまいが、とにかくに泥坊の仕業だよ。む

かしからそんな伝説のあるのを利用して、白い女に化けて来るんだよ。つまり幽霊の真似をして方々の若い娘をさらって行くのさ。その行くえの判らないというのは、どこか遠いところへ連れて行って、淫売婦か何かに売り飛ばしてしまふからだろう。美しい娘にかぎってさらわれるというのが論より証拠だ。ねえ、そうじゃないか。」

「そうでありましょうか。」と、李太郎はまだ不得心らしい眼色を見せていた。

「お前からここの主人によく話してやれよ。それは渾河に投げ込まれた女の幽霊でもなんでもない。たしかに人間の仕業に相違ない。たしかに泥坊の仕業で、幽霊のふりをして若い娘をさらって

行くのだと……。いや、まったくそれに相違ないよ。昔は本当に幽霊が出たかも知れないが、中華民國の今日にそんなものが出るはずがない。幽霊がはいつて来るときに、戸がこわれるというのも一つの証拠だ。何かの道具で叩きこわしてはいつて来るのさ、ねえ、そうじゃあないか。ほんとうの幽霊ならば何処かの隙間すきまからでも自由にすつとはいつて来られそうなものなのに、怖ろしい音をさせてはいつて来るなどはどうも怪しいよ。それらを考えたら、幽霊の正体も大抵は判りそうなものだが……。」

あっぱれ相手の蒙もうをひらいたつもりで、堀部君はここまでひと息にしゃべり続けたが、それは一向に手ごたえがなかった。李太郎は木偶でくの坊のようにただきよろりとして、こっちの口と眼の動

くのを眺めているばかりで、なんともはつきりした返事をしないので、堀部君は少し焦れ^じつたくなつて来た。今どきこんな迷信にとらわれて、あくまでも雪女の怪を信じているのかと思うと、情けなくもあり、ばかばかしくも感じられてならなかつた。堀部君は叱るように彼を催促した。

「おい。そのことをここの主人に話して、早く安心させてやれよ。可哀そうに顔の色を変えて心配しているじゃないか。」

叱られて、李太郎はさからわなかつた。彼は主人の老人にむかつて小声で話しかけた。堀部君もひと通りのシナ語には通じていたので、彼が正直に自分の意見を取次いでいるらしいのに満足して、黙って聞く人の顔色を窺っていると、老人は苦笑いをしてし

ずかにその頭かしらをふった。

「まだ判らないのか。馬鹿だな。」

堀部君は舌打ちした。今度は直接に自分から懇々と言い聞かせたが、老人は暗い顔をしてただ薄笑いをしているばかりで、どうしても、その意見を素直には受け入れないらしいので、堀部君もいよいよ癩かんしゃく癩やくを起した。

「もう勝手にするがいい。いくら言つて聞かせても判らないんだから仕方がない。こんな人間だから大事の娘がさらって行かれるんだ。ばかばかしい。」

こつちの機嫌が悪いらしいので、老人は気の毒そうに黙つてしまった。李太郎も手持ち不沙汰のような形でうつむいていた。

「李太郎。もう寝ようよ。雪女でも出て来るといけないから。」と、堀部君は言いだした。

「寝る、よろしい。」

李太郎もすぐに賛成した。老人は挨拶して、自分の部屋の方へ帰った。寢床のむしろを探してみると、煖炉は丁度いい加減に暖まっているので、堀部君は靴をぬいで寢床へ上がって毛織りの膝掛けを着てごろ寝をしてしまった。李太郎はもう半分以上も燃えてしまった蠟燭の火を細い火縄に移して、それからその蠟燭を吹き消した。火縄は蓬よもぎの葉を細く縫よりあわ合せたもので、天井から長く吊り下げてあった。

疲れている堀部君は暖かい寢床の上でいい心持に寝てしまった

が、自分の頭の上にある窓の戸を強くゆするような音におどろかされて眼を醒ました。部屋のうちは真つ暗で、細い火縄の火が秋の螢のように微かに消え残っているばかりである。むこう側の寝床の上には、李太郎がいびきを立って寝入っているらしかった。耳をすまして窺うと、家のうちはしインとして鼠の走る音も聞えなかったが、表の吹雪はいよいよ吹き暴れて来たらしく、浪のような音を立ててごうごうと吹き寄せていた。窓の戸の揺れたのはこの雪風であることを堀部君はすぐにさと覚った。満洲の雪の夜、その寒さと寂しさには馴れていながらも、堀部君はなんだか眼がさえて再び寝つかれなくなった。

床の上に起き直って、堀部君はマッチをすって、懐中時計を照

らしてみると、今夜はもう十二時に近かった。ついでに巻煙草をすいつけて、その一本をすい終った頃に、烈しい吹雪はまたどつと吹き寄せて来て、窓の戸を吹き破られるかと思うように、がたがたとあおられた。宵の話を思い出して、かの雪女がちんにゆう闖入して来る時には、こんな物音がするかも知れないなどと堀部君は考えた。そうして、またもや横になったが、一旦さえた眼はどうしても合わなかった。

「なぜだろう。」

自分は有名の寝坊で、いつも朋ほうばい輩たちに笑われているくらいである。なんどきどんな所でも、枕につけばきつと朝までは正体もなく寝てしまうのが例であるのに、今夜にかぎって眠られない

のは不思議である。やはりかの雪女の一件が、頭のなかで何かの邪魔をしているのではあるまいか。俺もだんだんシナ人にかぶれて来たかと、堀部君は自分で自分の臆病をあざけったが、また考えてみると、幽霊よりも馬賊の方が恐ろしい。幽霊などは初めから問題にならないが、馬賊は何をするか判らない。日本人が今夜ここに泊り込んだのを知って、夜なかに襲つて来ないとも限らない。堀部君は提げ鞆かばんからピストルを探り出して、枕もとにおいた。こうなるといよいよ眠られない。いや、眠られない方が本当であるかも知れないと思ひ直して、堀部君は寢床の上に起き直つてしまった。

寝しずつまった村の上に吹雪は小やみもなしに暴れ狂っていた。

夜がふけて煖炉の火もだんだん衰えたらしく、堀部君は何だかぞくぞくして来たので、探りながら寢床を這い降りて、まん中の土間へ焚き物の高梁コーリヤンを取りに行つた。土間の隅にはかの土竈どべつがあつて、そのそばには幾束の高梁が積み重ねてあることを知つているので、堀部君は探り足でその方角へ進んで行くと、切株の腰掛けにつまずいて危うく転びそうになつたので、あわててマッチをすると、その火は物に掴つかまれたようにふつと消えてしまつた。

その一刹那せつなである。入口の戸にさらさらと物の触れるような音がきこえた。

暗いなかで耳を澄ますと、それは細かい雪の触れる音らしいので、堀部君は自分の神経過敏を笑った。しかもその音は続けてきこえるので、堀部君はなんだか気になってならなかった。さつきから吹きつけている雪の音は、こんなに静かな柔かいものではない。気のせいか、何者かが戸の外へ忍んで来て内を窺っているらしくも思われるので、堀部君はぬき足をして入口の戸のそばへ忍んで行った。戸に耳を押し付けてじつと聞き澄ますと、それは雪の音ではない。どうも何者かがそこに佇たんでたいるらしいので、堀部君はそつと自分の部屋へ引つ返して、枕もとのピストルを掴ん

だ。それから小声で李太郎を呼び起した。

「おい、起きろ、起きろ。李太郎。」

「あい、あい。」と、李太郎は寝ぼけ声で答えたが、やはりすぐには起き上がりそうもなかった。

「李太郎、早く起きろよ。」と、堀部君はじれて揺り起した。

「雪女が来た。」

「あなた、嘘あります。」

「嘘じゃない、早く起きてくれ。」

「ほんとうありますか。」ど、李太郎はあわてて飛び起きた。

「どうも戸の外に何かいるらしい。僕も一緒に行くから、戸をあけてみる。」

「いけません、いけません。」と、李太郎は制した。「あなた、見ることよろしくない。隠れている、よろしい。」

暗がりで見えないが、その声がひどくふるえているので、かれが異常の恐怖におそわれているらしいのが知られた。堀部君はその肩のあたりを引つ掴んで、寢床から引きずりおろした。

「弱虫め。僕と一緒に行くから大丈夫だ。早くしろ。」

李太郎は探りながら靴をはいて、堀部君に引つ張られて出た。入口の戸は左右へ開くようになっていて、まん中には鍵がかけあつた。そこへ来て、また躊躇ちゆうちよして、また躊躇ちゆうちよしているらしい彼を小声で叱り励まして、堀部君はその扉をあけさせた。李太郎はふるえながら鍵をはずして、一方の扉をそつと細目にあけると、その隙間か

ら灰のような細かい雪が眼つぶしのようにきつと吹き込んで来た。片手にはピストル、片手はハンカチーフで眼をぬぐいながら、堀部君は扉のあいだから表を覗くと、外は一面に白かった。

どちらから吹いて来る風か知らないが、空も土もただ真っ白な中で、そこにもここにも白い渦が大きい浪のように巻き上がって狂っている。そのほかにはなんの影も見えないので、堀部君は案に相違した。なんにも居ないらしいのに安心して、李太郎は思い切つてその扉を大きく明けると、氷のように寒い風が吹雪と共に狭い土間へ流れ込んで来たので、ふたりは思わず身をすくめる途端に、李太郎は小声であつと言つた。そうして、力いっぱい堀部君の腕をつかんだ。

むと、家のなかから又もや影のように迷い出たものがあつた。

その影は二人のあいだをすりと摺りぬけて、李太郎のあけた扉の隙間から表へふらふらと出ていった。

「あ、クニヤン 姑娘。」と、李太郎が小声でまた叫んだ。

「うちここの家の娘か。」

あまりの怖ろしさに李太郎はもう口がきけないらしかつた。しかしそれが家の娘であるらしいことは容易に想像されたので、堀部君はピストルを持ったままで雪のなかへ追つて出ると、娘の白い影は吹雪の渦に吞まれてたちま忽ち見えなくなつた。

「早く主人に知らせろ。」

李太郎に言い捨てて、堀部君は強情に雪のなかを追つて行くと、

門のあたりで娘の白い影がまたあらわれた。と思うと、それは浪にさらわれた人のように、雪けむりに巻き込まれて門の外へ投げやられたらしく見えた。門は幸いに低いので、堀部君は半分夢中でそれ乗り越えて、表の往来まで追って出ると、娘の影は大きい楊やなぎの下にまた浮き出した。

「姑娘、姑娘。」と、堀部君は大きい声で呼んだ。「上那児シャンナールチ去。ユイ」

どこへ行く、などと呼びかけても、娘の影は見返りもしなかった。それは風に吹きやられる木の葉のように、何処どこともなしに迷って行くらしかった。

それでも姑娘を呼びつづけて七、八間けんほども追って行くと、又

ひとしきり烈しい吹雪がどつと吹きまいて来て、堀部君はあやうく倒されそうになつたので、そこらにある楊に取り付いてほつとひと息ついた時に、堀部君はさらに怪しいものを見せられた。それはさつき門内の空地にさまよつていた女のような白い影で、娘よりも二、三歩さきに雪のなかを浮いて行くと、娘の影はそれにおくれまいとするように追つて行くのであつた。うず巻く雪けむりの中にその二つの白い影が消えてあらわれて、よれてもつれて、浮くかと思えば沈み、たゆとうかと思えばまた走つて、やがて堀部君の眼のとどかない所へ隠れてしまった。

もう諦めて引つ返して来ると、内には李太郎が蠟燭をとぼして、恐怖に満ちた眼色をしてぼんやりと突つ立っていた。

「姑娘はどうした。」と、堀部君はからだの雪を払いながら訊いた。

「姑娘、おりません。」

堀部君はさらに右の方の部屋をたずねると、主人の老人は寢床から這い落ちたらしい妻を抱えて、土間の上に泣き倒れていた。娘らしい者の姿は見えなかった。

話はこれぎりである。堀部君はあくる朝そこを発つて、雪の晴れたのを幸いに、三里ほどの路をたどつて劉の家をたずねると、その一家でもゆうべの話を書いて、みな顔色を変えていたそうである。ここらの者はすべて雪女の伝説を信じているらしいという

ことであつた。もし堀部君に探偵趣味があり、時間の余裕があつたらば、進んでその秘密を探り究めることが出来たかも知れなかつたが、不幸にして彼はそれだけの事実をわたしに報告してくれずに過ぎなかつた。

青空文庫情報

底本：「鷺」光文社文庫、光文社

1990（平成2）年8月20日初版1刷発行

初出：「子供役者の死」隆文館

1921（大正10）年3月

入力：門田裕志、小林繁雄

校正：松永正敏

2006年10月31日作成

2011年10月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪女

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>